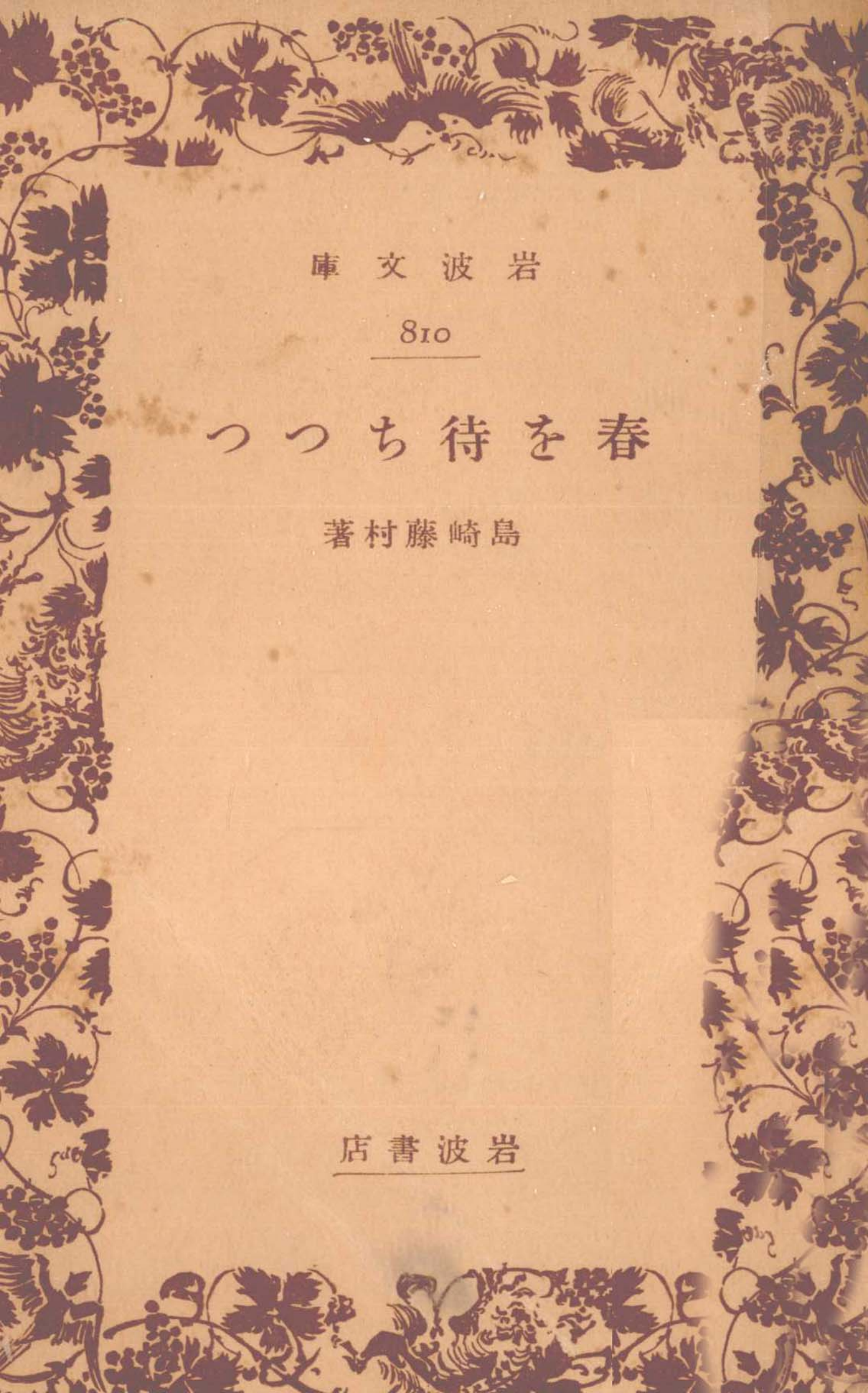




岩波文庫

810

春を待ちつ

島崎藤村著

岩波書店

(大森製本)

昭和七年三月二十五日印
昭和七年四月一日發行
昭和九年二月十五日第二刷發行

春を待ちつつ*

定價二十錢

著者

島崎藤村

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地

岩波茂雄

印刷者

東京市本所區鷹橋一丁目廿七番地ノ二

守岡功

凸版印刷株式會社印刷

岩波文庫
810



發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇一八七〇一八八番
九段 〇一八九〇一八〇番
（二番、小賣部専用）
振替 東京 二六二四〇番

庫 文 波 岩

810

つつち待を春

著 村 藤 崎 島



店 書 波 岩

つ っ ち 待 を 春

(集 想 感)

" It seems to me you have reached the same crisis which I had attained in the days when I was about to write Brand, and I am convinced that you, too, will know how to find the healing drug that can expel disease from your body. In energetic production lies an admirable cure. "

From a letter of Henrik Ibsen.

目次

目次	次	5
自然	九	
愛	一一	
一茶の生涯	一五	
芭蕉のこと	二三	
トルストイの晩年	三一	
ドストイェフスキイのこと	三五	
大正十四年を迎へし時	三八	
四つの問題	四二	
生長と成熟	五一	
前世紀を探索する心	五六	
反省	六三	
フランシス・ジヤンムの言葉	六三	
カアライルとホヰツトマン	六五	
愚と惡	六六	

有島武郎君のこと	六六
濕れる松明のごとく	六九
流行と不易	七〇
滑稽の大きな力	七〇
浅瀬を奔り流るゝ水のごとく	七一
大　暑	七一
都　會	七四
二三の事實	七六
農民のために	八二
信濃の婦人	八四
舊い學窓のこと	八六
小屏風の言葉	九一
戸川秋骨君著隨筆集『文鳥』の序	九三
登　音	九五
老　年	九七
言　葉	一〇一
創　作	一〇二

チエホフの『三人の姉妹』	一〇三
ストリンドベルクの童話集	一〇三
眞の人間を書くことに	一〇四
思想と人物	一〇四
祕密	一〇五
『ブラウシキンこそ吾々の教師である』	一〇五
先輩と考へて見ることによつて	一〇六
才能を有するものはまた勇氣をも有する筈である	一〇七
齋藤緑雨の言葉	一〇八
口語と詩歌の一致について	一〇九
吾國の象徴主義	一一〇
茶人の言葉	一一一
消極と積極	一一二
相聞の歌	一一三
『人形の家』を讀みて	一二三
眼醒めたものの悲しみ	一二八
透谷君の三十回忌に	一二三

身のまはりのこと	一三六
太陽の言葉	一四五
必然性	一四八
美を積むもの	一四九
春を待ちつゝ	一四九

自然

自

『花にも落日がある。』とはロダンの言葉であるとか。あのすぐれた彫刻家が、石膏や大理石を取扱ふことばかりでなくて、言葉の術にも長けて居たといふことは、實際不思議なくらゐだ。

同じロダンの言葉に、

『單に動物的なものから限りなく深い精神に充ちたものに至るまで、愛はあらゆる形相に於いて私には崇い。』

然

これは雑誌『大街道』に譯載されたエレン・ケエ女史の訪問録の中に見つけた言葉である。ロダンはその言葉の後につづけて、『それはすべては自然の手の中にあるから』と語つたといふ。

餘程の謙虚な心持で自然を見た人でなければ、斯ういふことは言へまい。自然の現はすものはすべて偉大と美とを持つて居ると言へるやうな人でなければ、單に動物的なものの中にも、限りなく深い精神に充ちたものの中にも、同じやうに崇い愛の形相を見出すやうなことは出来まい。その訪問録の中には次のやうな言葉も出て居る。

9

『年若かつた時には、私は自然を支配し、匡正するのは藝術家の權能であると信じてゐました。といふのは、まだ自然を知らない時には、自然を匡正するのは自分の天賦であると信じがちなも

のですから。年をとるにつれて、私はますます熱情的に自然を愛するやうになり、また自然が正しさを持つてゐることがますます明かに見えて來ました。自然を會得しようと學ぶより他にはありません。私達が常により明かに自然を啓き現はさうといそしむ時に、私達はますます發見することが出来るのです。私達の眼が一度自然の無盡藏なことに開かれ、さうして自然をその眞理の中に再現しようとする他に努め求めるところがないならば、私達は私達の天賦の涸渴を怖れることはありません。美は在るのです。存在するもの一切の中にあるのです。』

佛蘭西の旅にある間、私はロダンの製作に接する多くの機會があつた。しかし私はあのセザンヌの繪畫に心を傾けて行つたと同じやうな親しみは持てなかつた。幾度かロダンに對する私の考へ方は變つた。そして、セザンヌの親しみ易く、ロダンの親しみ難いのは、やがて東洋人としての私達の性情を語るものであることを思つた。ロダンももう故人だ。私はこのエレン・ケエの訪問記などを讀んで見て、ロダンといふ人の深い自然の愛を一層よく知ることが出來、その制作を考へて見る上に一つの解を得たやうに思つた。ロダンにあつては姿態が思想を生むのであつて、思想が姿態を生むのではない、と言つたエレン・ケエの評も面白いと思つた。

いかにロダンが素朴な悦びを持ちつゞけた人であつたかは、左の談話の一節を見ても窺ひ知られるやうに思ふ。ロダンはエレン・ケエにむかつて、次のやうに語つて見せたといふことである。『今日の人々は單純な事物に心をひかれるといふことが全然ないのです。』

愛

瓜哇の旅から歸つた際の加藤朝鳥君の土産話に、瓜哇人が一生の間に邂逅することのある婦人はおほよそ四人の區別があつて、それらの四人の婦人はそれぞれ相異なつた愛の對象となるべきものであるといふ。四人の婦人とは、左のごとき人達である。

一、崇拜するもの。

二、子を生むもの。

三、奴隸。

四、同じもの。

この土産話は、それから私の記憶に残つて居て、折にふれては自分の胸に浮んで來るし、氣の置けない客でもある時にはそれに就いて語り合つたこともある。

第一の崇拜するものとは、言葉をかへて言へば憧憬するものであらう。青年時代の愛の對象が必ずしもこの第一の婦人であるとは言へまいが、憧憬の情の多分に含まれて居ることは争はれない。世には未完成のまゝで残されて行く愛も多い。憧憬そのまゝで過ぎ行く人のことを書いた作物も澤山にある。子を生んだ人の生活に、別に崇拜するものが顯れて來ないともかぎらない。だ

からこの第一の婦人が必ずしも青年時代の愛の對象であるとも言ひかねる。

第二の婦人はこゝにことわるまでもない。

ノラは人形ではあつても、瓜哇人の言ふやうな奴隷ではなかつた。そこで第三の婦人は問題になつて来る。人形は結局奴隷の象徴ではないか、子を生むがためのみあるやうな婦人は結婚制度の奴隷ではないか、さういふことは無論考へられる。しかし瓜哇人が一生の間に邂逅することのあるといふ奴隷は、それとは別の場合であらう。飽くことを知らない性の結合は一對の夫婦をも驅つて、互ひの奴隷と化するに至るであらう。嫉妬もまた人を奴隷に變へるものである。愛の争闘、男女の間の失望、家庭生活の倦怠などから、やがて奴隷を求める心が生れて来る。この第三の婦人が、結婚した人の生涯にあらはれて来ることは、多くの作物がそれを證據立てて居る。世人はこんな第三の婦人を責める前に、何故に奴隷を求める心が生れて来るかを想はねばなるまい。第四の同じものとは、自己に等しきものの意味であらう。『ロスメルの家』のレベツカは、あの主人公の前に告白して斯く言つて居る。

“It was love that was born in me. The great self-denying love that is content with life as we two have lived it together……

Rosmer. How do you account for what has happened to you?

Rebecca. It is the Rosmer view of life—or your view of life at any rate—that has infected my will.

Rosmer. Infected?

Rebecca. And made it sick, enslaved it to laws that had no power over me before.
You—life with you—has ennobled my mind.”

斯うした二人の間に生れて來たものは、家庭の破壊と、生涯の破滅とに終つて居る。ロスメル
の悲劇は、第四の婦人に邂逅しながら、しかもその愛を奈何ともすることの出来なかつたものの
一つの例であらう。

愛
スタンダールの『愛』の中には、ドン・フアンの型と、エルテルの型との二つに分けて、男女
の愛情を説いてある。ところが『エルテル』を書いたギョエテその人の情的生涯が普通に一種の
ドン・フアンのやうに想像されて、一生變ることない極めてプラトニツクな愛を持ちつゞけたと
いふダンテに比較されて居るからおもしろい。

このギョエテに對して、もつと進んだ見方をした人にエレン・ケエがある。エレン・ケエに言
はせると、ギョエテの愛には過去の一切のものに拘束せられるといふことがなかつた、彼は常に
新しい愛を感じた、彼は常に新しい生命を見出した、彼の愛は晩年になつても新しかつた、この
過去の一切のものに拘束せられなかつたところがギョエテの愛のすぐれたところであつて、單
なる多情、單なる移り氣とは相違したものである。さういふ點で彼に似た人を求めるならば佛蘭西
のジヨオジュ・サン夫人を數へることが出来る。これは確かにギョエテに對する普通の見方を
破つたものだ。あの『エルテル』を書き得た人は、その出發に於いて既にドン・フアンの出發と

は餘程相違して居るとも言へる。

病後に、私は萬葉集をあけて見て、相聞の歌の多いのには今更のやうに驚かされた。萬葉時代の人におもしろく思ふことは、天皇でも皇子でも正直な相聞の歌を読まれたことである。ありのままの心の形見を後世まで残されたことである。

ケエベル博士の書いたものを讀んで居るうちに、人の生涯がおほよそ四期に分けてあるのを見た。人は少年期に於いて現實主義者であり、青年期に於いて理想主義者であり、中年期に於いて懷疑主義者であり、老年期に於いて神祕主義者であると。これを人の私生涯にあてはめて見ても、少年の愛情の單純に現實的であることがうなづかれる。

近代人の愛の傾向が靈肉の一致にあるとは、よく人の言ふことである。靜思を生活に移すことから、愛の實が結ばれる。結婚を度外に置いて、靈肉の一致はあり得ない。ホヰットマンは性を重んじた詩人の一人であつて、それを直接に詩句の中に歌ひもしたが、その人の私生涯は獨身の中に過された。戀愛論を書いたカアペンタアもその例に洩れない。人生の濁流に投ずる清い源泉とし子供のことを考へたと言はるゝトルストイは奈何かといふに、その人の生涯は性慾の否定と、基督教的な禁慾説とに苦しみつゞけた。あれほど愛と結婚を力説し、子供の世紀を力説したエレン・ケエが、彼女自身に家庭の人でもなく、子供の母でもないといふは、なんといふ人生の皮肉だらう。見て來ると、近代人の生活は實に苦惱の多い、矛盾に満されたもので、世にいふ靈肉の一致がさう容易に實現し得るものとも思はれない。

一茶の生涯

(一茶旅日記のために書いた序)

この一茶の旅日記が何處に發見されて、いかにして世に出るやうになつたかは、いづれ勝峰氏のくはしい紹介があらう。この翻刻本の校正その他はすべて勝峰氏の骨折によつて成つた。さういふ勝峰氏はさきに芭蕉の俳句定本を編んで、考證の精確さ嚴密さに、世にも稀な熱心を示した人である。この一茶の旅日記が一字一句の末まで、原本手記の面影を注意深く傳へてあることは、私がこゝに言ふまでもない。

一茶の生涯

一茶の晩年は名高い七番日記を通して既に世に知られて居るが、あの境地へ到達するまでの道筋のことは今日まで明かでなかつた。享和四年から文化五年まで、一茶の生涯で言つて見るなら四十二歳から四十六歳まで、彼の中年時代の主な部分、從來多くの人が知らうとしても知り得なかつた彼の放浪時代の全く不明であつた部分が、凡そ五年ばかりの間に互つてこゝに窺はれる。

この一茶の旅日記のやうに長いこと埋れて居たものが、よく失はれずにあつて、彼が歿してから百年近くになる今日に讀まれる日の來たといふは、その事がすでに私達の心をそゝる。これは江戸の假住居の侘しい行燈のかけなぞでその日その日に書かれたらしい心覚えの手帳で、人に見